

花筐小学校6年生（46名）の実践

福井県今立郡今立町花筐小学校
細 川 か を り

タイトル 総合的な学習（防災教育）での「防災わらべ唄作り」の取り組み

ねらい 「災害」に関する課題追究や様々な体験活動を行い、いざという時にどういう行動をとったらいいのか、あるいは災害に対して何を備えていけばいいのかということを考え、身近な社会を見つめ直す。

また、学んだことを「防災劇」や「わらべ唄」として表現し、防災知識を啓発する一助とする。

経過・概要

○導入：地震体験シミュレーション

「その時あなたは？」（資料右→）

阪神淡路大震災の再現映像（人と未来防災センター制作）を見て考えることにより、地震の凄さ、被災のひどさをリアルに感じ、自分の学習テーマを考ええた。

○自分の追求テーマでの学習（グループ別追求）

- ①いざというときの行動について考える：地域で助け合いながら避難する事の大切さを学び、避難所について調べたり、防災用品などの備えについて学んだりした。
- ②地震のメカニズム調べ：なぜ地震は起きるのか、地震の起こるメカニズムについて学んだ。
- ③救急法を身に付ける：三角巾による応急手立てや、役に立つ薬草等について調べた。
- ④心のケアについて調べる：被災のショックで人の心はどうか、PTSDについて調べたり、そのケアの仕方を学んだりした。

○全員で一斉に体験学習

- ・救急法の体験学習をする：「いざというときに役立つ救急法」（心肺蘇生法・三角巾による包帯法）を救急法指導員より習った。（ゲストティーチャー 日本赤十字社救急法指導員 松森和人氏 田中進治氏）
- ・地震の体験談を聞く：地域の、福井震災や阪神淡路大震災の体験者からその時の様子を伺い、災害に対する関心を高めた。（ゲストティーチャー 地域講師6名）

災害シミュレーション

その時あなたは？

氏名

本日は災害が起きたら、あなたは生きていますか？大抵なものは言えますか？

30秒 ぐっぐりしている。ぼーっとしている。

3分 家の中を逃げ回っている。

30分 周りの人と同じように泣いている。

1時間 安全な場所に行く。

3時間 ボランティアの人が来る。

48時間 おなかがすいている。

12時間 ねて、体力を回復する。

24時間 おんねて助けを求めよう。

感想

こんな災害が起きたら、たくさんの方が死なうしたり泣いたりするから、いざというときに災害に備えていかなければならないなと思いました。災害が起きたら人と人が協力して助け合わないといけないということが分かりました。お年寄りや体の不自由な人を優先しないといけないと分かりました。



- ・揺れの恐怖、地面にひびが入り、家は何もかもが崩れ、地面から泥水があふれる。何がなんだか分からない状況の中、何もないところで過ごす人々にとって、家族の思いやりが大事だと分かりました。『自分だけ死ななければいい。』という心があってはいけない。」と真柄さんがおっしゃったことが心に残りました。
- ・福井震災は、縦にはね上がるような感じの地震だったことが分かりました。60年に一回起きるとしたら、もうすぐ起こるかもしれません。いつ起きるか分からないので、ダンスの上に物を乗せないようにしておいた方がいいと思いました。

- ・ **福井豪雨災害記録を見る**：7月の福井豪雨災害の記録写真を見て、現実に関心した。自分の町で起こった災害を実感し、感想を話し合った。

- ・ 何十枚かの写真を見て、とてもびっくりしました。大滝では道路が川みたいになっているし、柳では家もつぶれていました。一階においてあった物が全部だめになってしまっていて、掃除するのがたいへんです。
- ・ 自分が思っていたのよりひどかったのが驚きました。ボランティアの人の中には、中学生や高校生、それにおじいさんやおばあさんまでいたのに驚きました。この町は、みんなで助け合って作業したので早く片づいたのだと思いました。

・ 非常食試食

「アルファ米の白米とおこわ」、「缶詰のパン」を試食した。予想以上においしいと児童に好評であった。

缶詰パンは、ケーキみたいでおいしそうよ。



○表現する

- ・ **ポスターセッション**：グループ別発表

- ・ **防災劇「花の子広場」**

学習したことを防災劇の形にまとめ、学習発表会「花の子広場」で発表・発信した。

- ・ 地震のことは全然知らなかったけど、6年生になり勉強して少し分かりました。この分かったことをなるべく多くの人に知らせたいと思い、がんばって発表しました。発表では、全然緊張しなくて、楽しく終わられたのでよかったです。

- ・ **防災わらべ唄作り**

学んだ大事なことを啓発するために、七・五調の詩にして表現した。内閣府チャレンジプランに協力する形で発信した。(別紙資料)



考察

災害・防災について学習を行った今年度、奇しくも自分たちの町で水害を被災し、「実際に避難する」、あるいは「被災した家庭へ行って泥出しなどの作業に当たる」といったことに直面した児童も少なくない。またその後も、中越地震災害やスマトラ沖地震、津波災害と、正に「災」の年となってしまった。これほどまでに「防災学習」が、実際に生き抜くために必要だと感じざるを得ないとは皮肉としか言いようがない。また、「防災わらべ唄」を作るという活動は、できればもさることながら、その過程が大事であると思う。地域へ発信する事ができるほどに自分たちは学んできたのだという達成感を、味わうこともできた。

児童には、この学習をきっかけに災害に備えることの大切さを感じ、将来的に「災害に強い町づくり」に対する興味や意識を高くして、地域を支えていって欲しいと期待する。